

常磐松文庫蔵『九条家本源氏物語聞書』解題拾遺(四)

野村精一

渡辺道子

徳岡 涼

1

既にして、本解題拾遺第一稿(本誌第二二号所収「調査報告四十七—七 常磐松文庫蔵『九条家本源氏物語聞書』解題拾遺(一)」)において、一部指摘しておいたように、本書注の、一つの、かつ最大の特色として、「林逸抄」の引用の多いことを挙げておいた。その著者饅頭屋宗二とともに、この、戦後著しく盛行に及んだ源氏古註の研究のなかにあつても、いまだ全文翻刻さえ行われていないことでも判然たるように、一部を除き^(注) 充分な研究が施こされていないかみえる、この大著との関わりじたい、本書注のもつ史的意義を解く一つのキイであることは、疑いをいれる余地はない。それは、本書が単に、「岷江入楚」流の伝統的な古註亜流であることを超えて、たとえば、孟津、覚勝院、そしてこの林逸等と、ある種の圓環をかたちづくって、古今集における奈良伝授の系譜にもかかわるべき位置にあるかみえて、いわゆる南都連歌師圈における、いわば三条西源氏学の見えざる崩壊過程の大きな情況を形成

しているかに見える。ここでは、そうした展望のもと、そのもつとも基底にある諸データのひとつとして、本書における「林逸抄」の引用情況をみてみたい。以下、各冊にわたって巻別に拾つてゆくこととする。猶、誌面の都合で、その位置を示すことを主な目的とし、引用本文については長文のばあい適宜削訂を施した。「ナシ」とあるのは、当該巻に「林逸抄」の引用を欠くことを示し、「追」ナシは、その巻に「追」じたいも付されていないことを示す。以下判読されたい。ちなみに巻名表記は端作り表題によるものである。

2

○第一冊（「年報」第一五号所収）

一 桐壺 「追」ナシ

二 帚木 「追」

にこりにしめるほどよりも——林逸三云蓮葉の濁にし
ひとへに打たのみひかつかたは——
(二—三四ウ)

女をこそひとへニ頼たれと云心なり林逸ノ説
(二—三六オ)

三 空蟬 ナシ

四 夕顔 ナシ

五 若むらさき ナシ

六 末摘 「追」

- 七 紅葉賀 ナシ
- 八 花の宴 ナシ
- 九 葵 ナシ
- 第二冊（「年報」第一六号所収）
- 一〇 賢木 ナシ
- 一一 花ちる里 ナシ
- 一二 須磨 ナシ
- 一三 明石 ナシ
- 一四 滌標 ナシ
- 一五 よもきふ ナシ
- 一六 関屋 ナシ
- 一七 繪合 「追」ナシ
- 一八 松かぜ 「追」ナシ
- 一九 薄雲 ナシ
- 二〇 槿 ナシ
- 二一 をと女 ナシ

まけてやみにしかなと
さもおほしよらず――

てもし濁へし林逸
林逸云此の一段の詞説多し。一ニ六源のをくり

（二一七三才）

二二 玉鬘 ナシ

二三 胡蝶 ナシ

○第三册〔年報〕第一七号所収

二四 ほたる ナシ

二五 常夏 「追」ナシ

二六 篝火 ナシ

二七 はつね 「追」ナシ

二八 野分 ナシ

二九 御幸 「追」

しかくの事をそゝのかし——林云源の御詞也玉鬘

子なからのおほえにハ——同玉かつらを源しの御子の分

三〇 藤はかま 「追」ナシ

三一 真木はしら 「追」

うちにもきこしめしてけり——

少し御心懸給にや 林逸

あなわるや——

申給ふはわるき御心と云意也 林

林云 たなゝし小舟も雲の

三二 梅か枝

(三一三〇才)

(三一四二才)

(三一四三才)

そんわうの御いましめの――

曾孫といふ前後ニよらすその筋ラ曾と云

林逸ニ云そん卜書

（三一四四ウ）

「追」

す、みをくれたる――

かはりなるへし何か過て何か足ぬとかきしる事也林逸

（三一四八ウ）

三三 藤の裏葉

「追」

くちをしくこそおくしにけれとりなをし――
林逸哥を頭ノ中

（三一五五オ）

三四 わかな上

「追」

さしつきにみる物にもか――
林逸さしつきは中宮の御

（三一七〇ウ）

猶わらは心のうせぬにやあらん――

ほとに紫上も源へむつひ寄シと申給也林

忝こゝろくるしき――

なり 私恐るゝは心くるしき物なり忝は恐儀也同

あまりなる御思ひやり哉といふへし 草子の地也同

いてや此御ありさま一ところこそ――

女房衆の云る也同

も、ちどりの声もいとうらゝかに

声く霞の中ニ鳴々さまなり林

名残おほくのこりぬらん 草子の地也此詞ニ心多く

こもらんとおもふへき也林

御物語のとちめは—— 源氏のかへり給御心の名残を

中納言の思ふ也林

御はく、みおほし、りなから—— 中宮を源のはく、み

給しを思ひ給也林

(三一七一ウ)

三五 若葉下

「追」

いとき、ならはぬ事哉—— 林人を恨ルルこと心仕あるへし

(三一八六オ)

あをにひのおもてをりて—— 林せんかうの折敷

(三一八六ウ)

春の琴の音はみな—— 此詞古キ注にも心みえず

或本ニそへてかき合する物をと也林

春のおほろ月夜よ——

林源の御詞なり春を感じる心此ことにはあり下ノ詞ニ又秋の

むしの声より合—— 琴ニ虫の添たる心也林

(三一八七ウ)

いとかたき御事也御すくせとか—— 林小侍従か詞也御

萬のもの、音のうちたかひて—— 何れの引物にも

心えかたき詞なるへしと云ニ葉ニ葉 林逸

(三一八八オ)

三六 かしは木

「追」

院のしもへ—— 六条院なり^林

ちやうのめしつき所 庁の召つかふ者也^林 長ノ字を書たる本アリ

二品の宮の御事をおしみたれけるつゐてに——

おもひ給也とかしは木のとへる也^林 女三の二品ニ成給し所を

墨染こそなをいとうたて—— 誠の墨染にては有まし

けれ共すみそめと云^林

〔追〕

ふたあいのなをしのかきりをきて——

ぬ心也^林 此外河海花鳥説ニあり^林

みさきにきおはん声なん—— 御さきの声ニあらそひて

笛の声せんを聞かまほしきと御息所の詞なり^林

身にそへてもてあそひつゝ—— 此笛まことに柏木の

持給し笛と也夕霧の詞也卑下也^林

おもはん人にいかてつたへてしかなと—— 思ん人にとはよく達し

たる人に伝え度と柏木のの給しと也^林

これかねのかきりは—— かしは木の云し詞を夕霧の思ひ

出し給也このふえの音は柏木もてふきいたさぬと申給しとぞ^林

三八 すゝ虫

〔追〕

(三一九四ウ)

(三一九五オ)

(三一九九ウ)

(三一〇〇オ)

花つくえのおほひ——花籠をすゆる机也^林

(三一—一〇三オ)

院の御車にみこたてまつり——源氏の御車^三兵部卿同

車也 親王とは兵部卿^林

(三一—一〇三ウ)

○第四冊〔年報〕第十八号所収)

三九 夕霧

〔追〕

せくからに浅さそ——夕霧の哥也つみにせきえぬ物

成て名のたつ事有へきと也^林

けさやかなるけしき——かけはなれたる様には夕霧の

聞え給へは也^{二葉} はやあひ給し文とみえたりと御息所ノ思給也^林

(四—一〇オ)

あさましようこはいかに——夕霧の詞也花ちる里よりの文を

のべ給り^林

院の御前にはへりて 六条院也^林

なをくしの御ありさまや 平人とのやうにいやしきと也^林

大夫のめのと 雲ゐの鴈のめのと六位すくせと云しめのと^林

大和のかみの妹と——少将の事也

親類ほとこく染るもの也^林

(四—一〇ウ)

殿におはしても——雲ゐのかりの方^三也^林

六条院の人くを——

雁ノ御詞也^林

このうきたる名をそ——夕きりの思かけ給ふ事也^林

さりとて又あらはれて——女二宮の心を院のをしはかり給也^林

東おもては屏風をたて、——服の具ともを忌てしつらひ

たる也^林

ちんのかひ——にかひとは棚なり^林

誰か名かをしきとてしるて——女の御名こそ立へ

けれとなり^林

四〇 御のり

「追」

心ほそきすちは後の——千歳給仕の昔の如く此身ながら

如くにては心細からんと心つかひなり^林

薪こるおもひは今日を——今日を初にて行末遠く

のことく行すゑとをからんと也祝してよめるなり^林

こよひはすはなれたる——

たる也むとくは無用也^{清林}

あなたにもえわたり給はねは宮ぞ——

中宮の紫の方へわたり給と也^林 宮とは中宮ぞ

物のみ哀しき御心のまゝならはまちとり給ては心よはくもとゝめ給

（四—一一才）

（四—一二才）

（四—一六ウ）

（四—一七才）

つへき――

よはく見給んと源氏の御心つかひなり林

(四―一七ウ)

めやすき程にと――

の悦トはかりを御返事ある也林 此段は夕霧の蔵

(四―一八オ)

四一 まほろし

「追」

みつからとりわく心さしにも――

は限ぬ習そと也林

かゝるなかのかなしさのみにあらずをさなきほとより――

かく思ひ給也林

(四―二三オ)

四二 かほる中将

ナシ

四三 紅梅

「追」

はしかはしにも覚え給ぬ――

の御事也物の数にもあらぬと云心也林 私はしかはし

打ゑみて恨てのちならは―― 林三云 晝花ニ此詞可有引哥未見

(四―三一ウ)

四四 竹川

「追」 ナシ

○第五冊(「年報」第一九号所収)

四五 はし姫

「追」

宮にもかく御そうそこ——

宮へかたりて見せ申^林

何かはけそうたちて——

あれと也^林

なからん後もなと一こと——

つらんと也^林

かのわたりは——曳こめて——

へき——とは薫のやむましき間何とそして見せ奉^林と也

四六 椎かもと

「道」

君か折嶺の——

春ともしらん物をと也^林

おほろけのよすかならて人のことに打なひき此山里を——

云心なり おほろけならぬ事ならてはと云心也^林

宮も猶きこえ給へ——

しらぬかほよからんと也^林

中く心ときめきにも——

となり^林

ときく中の君そきこえ給ふ——

(五—七ウ)

(五—八オ)

(五—一三ウ)

(五—一四オ)

君そ匂への御返事書給ふ^林

心ほそく残りなけに――

有しニすまひの事はて、やかて参んと也薰の心也^林

ひたふるに思ひなせは――

はさて過る世なりけりと云り姫君への遺言也^林

さるかたにたえこもりて――^林尼などになれば女は却てよきと也

世に聞え有ましき――

たるも苦しからすと也^同

かゝるきはに成ぬれは――

くちをしからんよく姫君たちをうしろみよとなり^同

さすらへん契を―― 姫きみの行末を也^同

むまれたる家の程――

と也^林

ことゝいへはかきりなき――

なる心也^{一葉} 其事をことゝいへはけうめうなると也^林

月日の影は御心もて――

思しめす事もあらは調んとなり^林

行かたもなく――

(五―一四ウ)

(五―一五オ)

四七 総角

おもひやれとも行方もなき同

（五―一五ウ）

その御き帳をし出てこそ――

みすのかたへやる也林

なをさりことなと――

へき人と云心也同

（五―一六オ）

「追」

袖の色を引かけさせ――

物哉と也林

（五―二〇ウ）

此との、さやうなる心はへ――

如此の給しとなり弁か詞也林

（五―三二オ）

もときいふ人も侍らし――

さは有ましい事と云人有ましとなり同

（五―三二オ）

つくり出まほしけなる――

申度心さしふかう薫のおほしよる事然へきと也林

（五―三二オ）

雲霞をやはなと――

雲かすみにはよも乗給はしとなり同

（五―三二ウ）

又ひたふるに身をも思捨まし――

しにて又ひたふるに捨かたきと也林

（五―三二ウ）

さ夜衣きて――

かことはかこつ心もあり其は匂宮へ逢給る事を也林

（五―三二ウ）

色なる御心ニはをかしく——

心なり林

(五—三三才)

今夜さふらはせ給はて急——

御出あり度けしきを見て薫のかくの給也林

わつらはしき宮つかへの——

きよしを承と面あかめて薫のの給也林

(五—三三才)

掠めつ、——

に申給也林

(五—三四才)

紅葉のくちははるけやり爰にて句を切て水のみ草と読へし林

み、なれにたる猶あらし事と——

の事をの給ふ由也姫きみたちの心中也林

との人 殿人 薫のとの人也御下官也林

時、折ふし——

執心也林

(五—三四ウ)

まめなるかた 物なんと給はり事也林

(五—三五才)

四八 早蕨

ナシ

四九 やとり木

ナシ

五〇 東屋

たいふかもと――

舟の方の女房を給へと云也^林

さるものゝつらに顔を外さまに――

かた屏風などの方へかほを蔵し給也^林

たゝなるよりはいとをし

いとをしとは双紙のこと葉也何となくいとをしと也^林

お前にてえ耻あへ給はねは――

かくれ給ぬなり^林

いたちの侍らんやうなる――

かはしけにの給ふかわつらはしきと也^林

※「追」ニ林注記ナシ

五一
うき舟

「追」

こゝにはめてたき御すまいの――

置給を云り^林

またふりぬ物にはあれと君かためふかきこゝろにまつとしらなん

云るもまたふれぬと云心ニかなふへきにや^林

大殿の君のさかりに――

給也^林

（五―五四オ）

（五―五四ウ）

（五―五五オ）

（五―五五ウ）

（五―六五ウ）

またしらすおかしと—— 林云六君より浮舟はましたると也六
ひとひなん見しかは花も——

(五一六六オ)

今つくりたる家は此うちよりも面白からんの由也 林
白きかきを五ッはかり——

事也あや也ほめたる詞也 林

宮にはかくれなく——

用意を内記ありノまゝにはふ宮へ申すと也 林

(五一六六ウ)

五二 かけろふ

〔追〕

けからひといふ事は—— 林二薫の心也わか御供の人にも

(五一七六ウ)

かの君にたてまつらんと—— 母の詞也 林逸二薫へたて

まつらんとしたる也 清 林うき舟へと思ひしを大夫二出すと也 林

(五一七七オ)

これはむかしの人の御心さしなり 林うき舟の御心さし

(五一七七オ)

五三 手習

〔追〕

さたすきたる尼ひたひのみつかぬに——

(五一八六オ)

河海の心也 林

(五一八六オ)

とみには読もきかせつへくも——

(五一八六ウ)

様もなくなりつるをうれしと也 林

(五一八六ウ)

五四 夢のうき橋

ナシ

以上は全く形式的処理による必要最小限の表示にすぎないが、それでも、見られるように、「林逸抄」の引用と思われる注記は、ほとんどが「追」欄に集中していることが判然としている。しかしながら、にもかかわらず、「東屋」の巻のみ、全く例外の体である。その因由はなにか、おそらく本書の成立事情をしめす現象かと思われるが、これよりさきは、「林逸抄」そのものの成立過程の問題にもかかわってこよう。いま、それらへのアプローチの物理的余裕を欠いたまま、とりあえずのとじ目とせざるをえないことを、甚だ遺憾とする。

注1 今のところ井爪康之『源氏物語注釈史の研究』（新典社 平成五年）、岡寫偉久子・岡本千佳・西口尚子「源氏物語『林逸抄』林宗二自筆」―解題と翻刻『桐壺』巻」（『ビブリア』103号 平成七年五月）の二篇によるよりほかはない。

付表 調査報告四十七―四（「年報」十八号所収）正誤

頁行 誤

3 8 とみにはまいり給す

8 13 くろきも

9 14 壘は尼ニよせ

12 4 大和のたみの妹と

15 18 源氏御返哥

23 14 紫明抄には申侍れよ

31 5 一段障なき官とそ

正

とみにえまいり給す

くろきも――

海士は尼ニよせ

大和のかみの妹と

源し御返哥

紫明抄には申侍れと

一段障なき官とそ